京都大学東南アジア研究所ニュース

NEWSLETTER

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES, KYOTO UNIVERSITY

（2006年5月1日～2006年11月30日） No. 55

目　次 (CONTENTS)

21世紀COE　京都シンポジウム開催 …… 2
21st Century COE Program Kyoto Symposium November 9-13, 2006

京都大学とホーチミン市間で初の遠隔ビデオ会議 …… 3
The First Video Conference between Kyoto University and Ho Chi Minh City

ASAFAS —バンコク間遠隔ビデオ会議
The First Video Conference between ASAFAS and Bangkok Liaison Office

拠点大学交流事業共同ワークショップ …… 4
Core University Workshops in Kyoto

第8回京都大学国際シンポジウム　バンコクで開催
The 8th Kyoto University Symposium in Bangkok

第30回東南アジアセミナー開催 …… 5–6
The 30th Southeast Asia Seminar

人事　*Personnel Changes* …… 7–8

JCAS研究会　*JCAS Seminar*

連携研究 …… 9
Institute of Sustainability Science and KSI

＜栄誉＞ *Award Winners*
濱下武志教授　第17回福岡アジア文化賞（学術研究賞）受賞 …… 10
信田敏宏著『周縁を生きる人びと』に東南アジア史学会賞

＜東風南信＞ *Reflections* …… 11
タイのクーデタ今昔　玉田芳史
Coups in Thailand: Now and Then　Tamada Yoshifumi

＜ *Visitors' Views* ＞ …… 12–13

Colloquia …… 14

＜海外疾病だより＞ *Getting Sick Here and There* …… 15

＜連絡事務所だより＞ …… 16
Letters from Liaison Offices

研究会報告 …… 17–18
Report on Seminars

Publication News …… 19

図書室ニュース　*Library News* …… 20
Kyoto Review of Southeast Asia on a New Website

21世紀COE京都シンポジウム　ポスターセッション
発表者と参加者の間で熱心に意見交換が行われた

京都シンポジウムバンケットで民族衣装を身にまとって
壇上に並ぶ院生たち

21世紀COE　京都シンポジウム開催 2006.11.9-13

総合的地域研究の新地平

―アジア・アフリカからディシプリンを架橋する―

2006年11月9日から13日にかけて、本研究所は大学院アジア･アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）との共催で国際シンポジウム「総合的地域研究の新地平――アジア・アフリカからディシプリンを架橋する」を実施した。本年度は21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」の最終年度に当たることから、本プログラムが目指してきた「総合的地域研究」の到達点を示し、今後の課題について議論するために本国際シンポジウムを開催した。

本シンポジウムは、４つのメイン・パネル、８つのサテライト・ワークショップ、そしてポスター・セッションで構成されており、４つのメイン・パネルでは、総合的地域研究とは何かを考える上で重要となってくる次のような４つのテーマが論じられた：１．景観の自然史・環境の社会的構築、２．地域情報学の展開、３．人の移動と社会空間の生成――変動する地域への視座、４．アジアとアフリカにおける開発と民主化の展望――ローカルな視点から。メイン・パネル２は、インターネットを通じた双方向のビデオ会議・遠隔講義システムを利用してベトナム国家大学ホーチミン校と２元中継を行い、ベトナムでは国営放送が生放送で取り上げた。

８つのサテライト・ワークショップとポスター・セッションは、大学院生を中心にして企画を進めてきたものであり、本COEプログラムが育成してきた若手研究者が、彼らが招聘した研究者とともに最先端の研究成果を発表しあうだけでなく、セッションが終わってもお互いに意見交換を行う姿が各所で見られた。

本研究所員、ASAFAS教員、地域研究統合情報センター（CIAS）員に加えて国内から28名、海外から25名を招聘して行われた本国際シンポジウムには、348名という非常にたくさんの方がメイン・パネルやサテライト・ワークショップに積極的に参加してくれて大盛況であった。また、フィールドに立脚して緻密な情報収集・分析を得意とする地域研究のあり方について、こうした手法に慣れていない若手の海外研究者にはとまどうものもおり、中には「(このシンポジウムに出席して）地域研究のテロリズムにさらされた」と言う研究者もいた。テロリズムといっても非常にポジティブな意味で知的刺激を受けたということであり、研究の手法さえも問い直す機会となったということである。本国際シンポジウムでは特に若手の海外研究者にとって地域研究にさらされた絶好の機会であり、また、これまで地域研究とは何かを問われ続けてきた本研究所員、ASAFAS教員、大学院生、CIAS所員にとっては地域研究を再熟考するまたとない機会になったと思う。

プログラム・リーダー
市川光雄ASAFAS教授

（文責：岡本　正明）

21 世紀 COE プログラム

京都大学とホーチミン市間で初の遠隔ビデオ会議

11 月 11 日、京都大学とベトナム・ホーチミン市間で初の遠隔ビデオ会議が開催された。京大側は、京都大学百周年時計台記念館で開催された 21 世紀 COE 京都シンポジウム・地域情報学の展開セッション、ホーチミン市側は GIS-IDEAS (International Symposium on Geo-informatics for Spatial-Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences)2006 国際会議である。

ASAFAS の鈴木玲治氏、およびベトナム科学技術院（VAST) 物理学研究所 Ho Dinh Duan 氏を司会に、京都側から荒木茂、竹田晋也両氏（ASAFAS)、ベトナム側から Pham Bach Viet 氏（VAST) と Bui Ta Long 氏（ベトナム国家大学）の報告があり、Surat Lertlum 氏（タイ・AIT, CSEAS 元外国人研究員)、河野泰之氏などからコメントを得た。また、本学生存基盤ユニット長の井合進教授もホーチミン側に参加された。地域情報学の展開や経験交流が好評を博したが、同時にビデオ会議の今後の課題や改善も提起された。

なお、遠隔ビデオ会議の基盤整備は情報処理室が中心になって進めたが、当日は本学学術情報メディアセンターやベトナム科学技術院情報技術研究所の協力を得た。ベトナム科学技術院本省（ハノイ市）からは今後の共同研究に期待が寄せられている。

（文責：柴山　守）

京都からの映像を見つめるベトナム側の参加者

ASAFAS ―バンコク間　遠隔ビデオ会議「ネットワーク型地域研究の成果と展望」

上記のベトナム・ホーチミン市と京都大学間のビデオ会議に先立ち、9 月 29 日京都大学工学部 ASAFAS 会議室にて、21 世紀 COE プログラムのネットワーク部会成果発表ワークショップが開催された。本プログラムのセッション 1　では「21 世紀 COE プログラムで開発されたネットワーク型地域研究ツール」と題して「ARIS 地形図画像データベース」など、7 件のデータベースやツールが紹介された。セッション 2 では「地理・空間情報学と地域研究」と題して、ネットワーク部会代表の木村大治助教授（ASAFAS アフリカ専攻）など　4 件の報告がなされ、後半の 2 件はバンコク連絡事務所と ASAFAS 会議室間の双方向遠隔ビデオ会議で行われた。

バンコク側からは岩城考信氏（チュラーロンコーン大学社会調査研究所客員研究員）や Surat Lertlum 氏（AIT, 元 CSEAS 外国人研究員）の報告があった。東南アジア研究所バンコク連絡事務所が遠隔ビデオ会議システムで外部と接続するのは初めてであり、ASAFAS 会議室の参加者には大好評であった。引き続き、「遠隔教育とオンサイト・エデュケーションの融合をめざして」をテーマとするパネル討論が行われ、約 50 名が参加した。地域研究に情報学や情報技術を導入した事例やツールの交流がなされた意義深いワークショップであった。今後、こうした経験交流がさらに拡がるよう期待したい。

（文責：柴山　守）

（上）バンコク連絡事務所からの参加者
（下）ASAFAS 会議室でのワークショップ

拠点大学交流事業共同ワークショップ

日タイ拠点大学交流プログラムの一環として2004年度からスタートした共同研究6「市場と経済連携」によるシンポジウムが2006年10月27日と28日の両日、同志社大学寒梅館ホールにて開催された。「東アジアにおけるFTA/EPAの発展――EUと日本」「ASEAN」「CLMV諸国と国境貿易」「広域的地域枠組」「タイと日本」「アメリカからの視点」の6セッションにわたり、12の発表と各2～3名のディスカッサントによるコメントに続き、活発な討論が展開された。同共同研究が、リーダーの阿部茂行氏のもとで3年にわたり、アセアンを始めとする地域経済連携、グローバル化と地域経済について蓄積してきた研究と交流の成果として2日間、友好的な中にも活発な議論が交わされた。参加者は、タイ（Wisarn Pupphavesa, Srawooth Paitoonpong, Chalongphob Sussangkarn, Bhanupong Nidhiprabha, Sasipen Bhuvapanich, Suthiphand Chirathivat, Chaiwoot Chaipan, Pasuk Phongpaichit）、シンガポール(Shandre Thangavelu)、インドネシア（Bambang Brodjonegoro）、ベトナム（Tien Dung Nguen）、マレーシア(Mahani Zainal Abidin, Wan Khatina Wan Nawawi)、韓国(Keun Lee)、アメリカ(Janis Kea, Michael Plummer)、そして日本(阿部茂行、浦田秀次郎、江崎光男、原正行、根岸祥子、塩谷雅弘、上田曜子、高阪章、篠原総一、猪口真大、槙太一、西村理)で、本研究所からも水野所長始め多数の参加者があった。

また、共同研究8として2005年度からスタートした「変貌する『家族』」による小セミナーが11月14日、東南アジア研究所にて開催された。この時期に京都に会したメンバー3名による発表でタマサート大学のChalidaporn Songsamphan氏は、1976年のタイにおける家族法の改編にともなって交わされた議論からタイにおける家族と父権制をフェミニズムの立場から論じた。チェンマイ大学のKwanchewan Buadaeng氏とPrasit Leeprecha氏が、それぞれ近年都市に移動するカレンの結婚の問題、山地のモンの親族の儀礼についての民族誌的な報告を行った。当日は、拠点大学交流事業メンバーとともに、研究所内外から多数の参加者があった。

（文責：速水　洋子）

同志社大学寒梅館ホールで「市場と経済連携」をテーマとするワークショップが開催された

第８回京都大学国際シンポジウム バンコクで開催

昨年第7回京都大学国際シンポジウムがバンコクのナイラートホテルにて開催されてからちょうど1年が過ぎた。第7回シンポウムは本研究所とASAFASと防災研究所が主幹したものであった。2006年の第8回シンポジウムも同じ時期（11月23～25日）に同じホテルで“Towards Harmonious Coexistence within Human and Ecological Community on This Planet”というテーマのもとに開催された。責任部局は現在進行中の7つの21世紀COEに関係する大学院および研究所である。23日夕刻からポスターセッションがスタートした。24日は横山俊夫副学長の司会で、タイの5大学から招待された代表および松本紘京大理事の開催の挨拶に始まり、25日まで各21世紀COEからの代表らを中心に7つの一般セッションおよびパネルディスカッションが行われた。本研究所からは西渕光昭、中口義次および外国人研究員のCaverlee Cary博士、ASAFASからは平松幸三研究科長および小林繁男教授が参加し、平松研究科長は基調演説、その他4名はIntegrated Area Studiesに関連する一般セッションで口頭発表を担当した。またA.Terry Rambo元本研究所教授もコンケン大学からパネラーとして参加した。

（文責：西渕　光昭）

タイの５大学代表を迎えてシンポジウムが開催された

第30回東南アジアセミナー開催

「開発」現場における地域研究
－環境・貧困・実践－

2006年9月4日から8日の5日間、第30回東南アジアセミナーを実施した。30年目の節目を迎えた今年度のセミナーは、「『開発』現場における地域研究――環境・貧困・実践」と題し、研究者が「開発」をいかに捉え、そしてまた、どのように「開発」に関わってきたのかについて、受講生とともに根底から問い直すものとなった。

21世紀を迎え、グローバル化や情報技術の発展により、東南アジアのあらゆるところで「開発」現象は、ますます身近なものとなっている。東南アジアを対象としてきた地域研究者にとっても、研究者として客観的に地域を研究するだけでよいのかどうかということが、真剣に問われている。本セミナーの狙いは、そうした「開発」と研究のはざまで苦悩してきた経験豊かな講師陣を迎え、大学院生を中心とする受講生との間で本音の議論を展開してもらうことであった。

北は北海道、西は福岡県から、学部生、院生、社会人など幅広い層の受講生が参加した（22名）。なかでも修士課程以前の学生が17名と多かった。受講生の感想文によれば、「開発はおこがましい」「開発は構造暴力である」といういくつかの講義に共感すると同時に、しかし地域研究を行えば「開発に巻き込まれざるを得ない」という現実も良く理解できたという。また、「開発と関わらざるを得ない地域研究」そのものへの疑問も出された。一方では、そうした「迷い」を断ち切り、地域の人々と「生き死にを共にする」覚悟で挑む研究、すなわち「実践」的地域研究が必要とされるという講義に共鳴する意見もあった。

議論への全員参加を目指した本セミナーでは、5日間の全ての講義において、全受講生に感想メモを作成してもらい、意見発表のしやすい環境を作るよう心掛けた。最終日の総合討論では「これから自分は海外へ赴き、地域に関わるべきなのだろうか」という受講生の苦悩がにじみでた本音の議論もなされた。受講生は、「開発」や研究はどうあるべきかを考えることができただけでなく、講義を聴き自分の意見を語るなかで、今後の進路や自らの生きる道に対して、向き合う作業を行っていた。自己と向き合う、という作業ができたことは、これまでの東南アジアセミナーとは一味違う収穫だったのではないかと考える。　（文責:岡　通太郎）

2006年9月8日
第30回東南アジアセミナー最終日の総合討論の様子

東南アジアセミナーに参加して

井上　博登

今回のテーマは、「『開発』現場における地域研究――環境・貧困・実践」でした。文化人類学を専攻している自分にとって、もはやフィールドにおいて「開発」の影響に目をつぶることはできないだろうという現状への問題意識と、屈指の伝統と歴史を誇る京都大学の地域研究に携わる方々が、フィールドにおける「開発」とどのように接し、研究と実践との関係をどのようにとらえていらっしゃるのかを聞きたくてセミナーへの参加を決めました。

セミナーを振り返ってみてまず感じるのは、非常に多岐にわたる分野の先生方が、それぞれかなり異なった視点からの講義をしてくださり、それを連日にわたってまとめて聞くことができたのはとても贅沢な時間であったという感慨です。毎回、お目当てにしていた方の講義がありましたし、期待を裏切らない充実した講義が多かったと思います。

講義では、研究者・元JICA技術専門家・NGOといった違った立場からのお話、さらに農学・農業経済学・文化人類学・政治学といった違った分野からの、それこそ「開発」をめぐる千差万別のお話を聞くことができました。最終日の総合討論の前に、ス

タッフの方がそれまでの議論を図示して整理してくれたのですが、「開発」という巨大な問題系に対して、まさに各論者によって想定している守備範囲がかなり異なることが明確になりました。各講義ごとに論者の色が強く出ており、20数名の参加者の専門分野もまた多様だったので、連日の講義の中で、各自が共感できたもの、そうではないもの、今まで知らなかった考え方を得ることができたものなどいろいろあったと思います。

今回の参加者の中には、「『開発』の引き起こす負の側面の解決に対して貢献できるような研究をしたい／するべきだ」というような倫理観をもっている方が多かったと思いますが、では実際の現場においてそれがどこまで可能なのかといった話題もトピックに上がり、実際に現場で活動されてきた方々のなかなか理想通りにはいかない本音の部分も聞けたと思います。

また、共通の関心をもっている学生が20数名集まるので、参加者間の交流も魅力的です。懇親会や質疑応答、総合討論の準備を通して、各自の関心や問題意識がわかり情報交換することができます。

私の反省点としては、最終日の総合討論に対する準備が足りなかったかなという点です。全体の総合討論なのでこれまでの講義をふまえつつ、議論が盛りあがるような論点を練っておく必要があるでしょう。また5,6名のグループに分かれて総合討論のための意見集約をしたのですが、各人の意見を集約してグループとしての論点にまとめるという作業は、時間も限られており思いのほか難しく、今後の課題となりました。

今後も、関心のあるテーマでの開催時には当セミナーに参加したいと思います。貴重で充実した機会を用意してくださり、大変ありがとうございました。

（早稲田大学大学院人間科学研究科）

吉川　太惠子

「国際開発論」「国際協力論」を所属する大学院で受講して、自分が描いていた開発・援助の世界がだいぶ現実世界とは異なっていることを感じ、少なからず無力感に陥っていました。そこで、今回の東南アジアセミナーのトピックスが、「『開発』現場における地域研究――環境・貧困・実践」であることから、開発・援助について自分のディシプリンとテーマに関連付けて考えてみたいと思い、セミナーに参加しました。

初日のオリエンテーション及び「総合討論」、次の日からそれぞれ、「環境」「貧困」「実践」という枠組みで、東南アジア諸国で豊富な経験を持つ講師が、それぞれの立場から失敗談をも含めた講義をされ、参加者は、開発・援助の現状について生の声を聞き、いろいろな観点から考えることができたと思います。開発・援助が必ずしも現地の人々の生活を向上させるわけではないと知り、改めてその難しさを痛感しました。

私のフィールドは、ラオスから難民として受け入れ3カ国に移民し、それぞれの国で再構築されたモン族社会です。また東南アジアは彼らの原点でもあります。フィールドが一箇所でないため、セミナーの講義を通じて、自分にとっての「援助」「フィールド」は何かを考え続けていました。私にとって、「巻き込まれる文化人類学者」「リンク・デリンク」の考え方、在地の重要性などのキーワードを講義から得ることができたのは何よりの収穫でした。

各地からバックグラウンドが異なる方々が参加したことで、質問の内容が偏らずに、率直な意見が聞けたのも良かったと思います。開発や国際協力について知識が豊富な人たちばかり集まった討議からは、ともすると聞こえてこない意見や発想を知るのも、東南アジアセミナーの魅力の一つだと考えます。また、セミナーを通して参加者同士の交流が深まったことは、今後のネットワーク作りにも大変役立つと思います。

最終日の「総合討論」をグループ分けしたことは、それぞれのグループの特性（学部・修士・博士／一般）が質問内容に反映されていて、効果があったと思います。ただ、全体の討議の時間がもう少しあったほうがいいように思うので、前日までの昼休みの時間をいくらか割くなどして、グループとして出す意見や論点を事前に整理しておいたほうが有効に時間を使えたのではないかと感じました。今後も多彩なトピックスでセミナーが開催されますことを願っております。

（法政大学大学院国際文化研究科）

人　事

教 員 人 事

＜新任＞

清水　展　教授

（2006 年 10 月 1 日付）

1974 年東京大学教養学部卒。76 年同大学院社会科学研究科修士課程修了、87 年同大学社会学博士号取得。79 年東京大学教養学部助手、80 年同大学東洋文化研究所助手、85 年九州大学教養部助教授、94 年同大学院比較社会文化研究科教授。

[主要著書]

『文化のなかの政治――フィリピン「二月革命」の物語』弘文堂，1991. ▽ *The Orphans of Pinatubo: Ayta Struggle for Existence*. Manila: Solidaridad Publishing House, 2001. ▽『噴火のこだま――ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』九州大学出版会，2003.

外国人研究者人事

■外国人研究員

羅　二虎（中華人民共和国）。上海大学歴史文化学部教授。2006 年 5 月 1 日～10 月 31 日。「近年の考古学的調査ならびにフィールドワーク研究からみた中国と東 南アジアの文化的相互連関について」

Abubakar　Eby　Hara（インドネシア）。ジェンベル大学社会政治学部上級講師。2006 年 5 月 1 日～10 月 31 日。「インドネシアにおける急進派･イスラーム主義者の運動について」

Caverlee Sturges Cary　（アメリカ合衆国）。カリフォルニア大学バークレイ校 GIS センター副所長。2006 年 8 月 1 日～2007 年 1 月 31 日。「人文学への GIS 応用」

Dias Pradadimara　（インドネシア）。ハサヌディン大学文学部歴史学科講師。2006 年 8 月 1 日～2007 年 1 月 31 日。「南スラウェシ・タナ・トラジャ県における社会形成と変容の社会史的・比較論的研究」

Guy Francois Trebuil　（フランス）。国際協力農業研究センター TERA 上級研究員。2006 年 8 月 15 日～2007 年 2 月 14 日。「自然資源管理の分権化――東南アジアにおける住民参加型資源管理へのコンパニオン・モデル適用の評価に関する研究」

Dorotea Agnes Rampisela　（インドネシア）。ハサヌディン大学農林学部講師。2006 年 9 月 1 日～2007 年 8 月 31 日。「南スラウェシ州における農村開発プログラムと地元民のエンパワーメント」

Kwanchewan Buadaeng　（タイ）。チェンマイ大学社会科学研究所研究員。2006 年 10 月 1 日～2007 年 3 月 31 日。「ビルマ－タイ跨境地域におけるカレンの宗教カルトと民族アイデンティティ」

■招へい外国人学者

Nadarajah Manickam　（マレーシア）。アジアコミュニケーションネットワーク副コーディネーター。2006 年 5 月 1 日～ 9 月 30 日。「アジアにおける持続しうる開発（または持続性）についての文化的固定概念」

Harriet T. Zurndorfer （オランダ）。ドセンテ大学中国研究所研究員。2006 年 5 月 1 ～ 28 日。「中国史のグローバルな経済史へ再編成――新たな視点から見た伝統的理解に関する研究」

Gareth Austin （イギリス）。ロンドン大学政治経済学院経済史上級講師。2006 年 7 月 3 ～ 29 日。「労働集約型工業化の世界史に関する研究」

Ingon Patamadit-Trebuil（フランス）。チュラーロンコーン大学理学部生物学科招聘教授。2006 年 8 月 15 日～ 2007 年 2 月 14 日。「ファーミングシステム・アプローチによるタイ農民の在来知識・技術の解明」

Jorge Villamor Tigno（フィリピン）。フィリピン大学社会科学哲学学部助教授。2006 年 11 月 1 日～ 2007 年 8 月 31 日。「外国人の目から見た日本――トランスナショナルおよび地域のアイ デンティティの展開過程における大阪在住フィリピン人の視点」

Petrus Jacobus Van Der Eng（オランダ）。オーストラリア国立大学経営情報管理学院商経学部准教授。2006 年 11 月 25 日～ 12 月 24 日。「アジア経済史、アジア経済論研究についての意見交換および資料収集」

■外国人共同研究者

Alwin Aguirre （フィリピン）。フィリピン大学ディリマン校文学部フィリピーノ・フィリピン文学科講師。2006 年 7 月 16 日～ 2007 年 1 月 15 日。「明日の歴史――アジアサイエンスフィクションにおける科学と未来への想像の会話」

Dao Minh Truong （ベトナム）。ベトナム国立大学天然資源環境研究センター研究員。2006 年 9 月 6 日～ 12 月 3 日。「ベトナム北部山地における過去 50 年間の土地・森林資源と人々の相互作用」

JCAS 研究会開催

10 月 3 日に、地域研究コンソーシアムの 2 研究会（地域情報学研究会、情報資源共有化研究会）および科研プロジェクト「アフロ・アジアの多元的情報資源の共有化を通じた地域研究の新たな展開」(基盤研究（A）：代表者　地域研究統合情報センター田中耕司教授）が共催で研究会を行った。当日は、科研メンバーに加え、附属図書館や国立国会図書館の司書の方々、大学院生の方々など約 20 名の方の参加があった。プログラムは以下の通りである。

■プログラム

日時：2006 年 10 月 3 日 13:30-18:00

場所：京都大学地域研究統合情報センター 3 階

◎「アメリカにおける史資料の保存共有事業の進展――最近の成果と今後の課題」（英語）：シカゴ大学図書館　ジェームズ・ナイ

◎「インド研究邦文史資料の状況　明治以降刊行の社会科学・人文科学分野文献」（日本語）：東京外国語大学 21COE　松本脩作

◎「ECAI プロジェクト――地域研究における GIS の応用利用」(英語)：カリフォルニア大学バークレー校　キャバリー・キャリー

ナイ氏の発表では、特にアメリカの南アジア研究における資料の共有化に関して、共同目録の作成、GIS の活用、データベースの作成などの事例を含め、具体的に紹介された。また、それらのプロジェクトが、各大学が得た研究助成を共同で運用することによって行われていることに言及された。松本氏の発表では、同氏の編著である『インド書誌――明治初年～ 2000 年刊行邦文単行書』について紹介され、日本国内におけるインド研究史を出版物から概観する機会を得られた。両氏の発表を通して、アメリカと日本におけるインド研究の動向と史資料の蓄積の関係性への知見を新たにするとともに、史資料の「共有化」への具体的な課題が明らかにされた。

後半のキャリー氏の発表では、電子地理情報プロジェクト（Electronic Cultural Atlas Initiative：ECAI）の概要と、今後の予定について紹介された。ECAI は、シドニー大学との共同ですすめられている時間地図（Time Map）プロジェクトなどに代表されるとおり、人文社会科学系分野における GIS 活用の推進と標準化を目的としたプロジェクトである。

（文責：北村　由美）

連 携 研 究

当研究所は、新たに二つの連携研究に参加することになった。その概要を以下に紹介する。

■生存基盤科学研究ユニット

http://iss.iae.kyoto-u.ac.jp/iss/jp/index.html

生存基盤科学研究ユニットは、宇治地区にある化学研究所、エネルギー理工学研究所、生存圏研究所、防災研究所と東南アジア研究所が共同で 2006 年 2 月に設置した組織である。

人類の生存基盤に深くかつ広範にかかわる「社会のための科学（Science for Society）」のシーズや、科学技術立国日本の将来を担う新しい技術、産業の創出、優秀な若手研究者の育成につながる「先端科学（Frontier Science）」のシーズをインキュベートすることを目的としている。

それぞれの研究所のミッションを跨ぐ分野融合的な研究テーマにフレキシブルに取り組むことにより、先進的な研究を総合化するとともに、創造的な融合研究を推進することを目指している。ユニットの公募研究において、当研究所は、「山地生態資源の持続的利用のための技術融合と制度設計――東南アジアを中心として」（代表者：河野泰之）や「地下構造と自然・社会・人間生態を結合する地域情報学の展開――東南アジアの都市地域を対象にして」（代表者：柴山守）と題する研究プロジェクトを中心となって組織するとともに、他の 4 研究所が組織する研究プロジェクトへも積極的に参加している。

生存基盤科学研究ユニットへの参加は、本研究所にとって、自然科学分野の先進的な基礎研究や応用研究と本格的な協力体制を構築する初めての試みであり、地域研究の応用範囲を技術研究分野や実践研究分野へとさらに拡張することが期待されている。

宇治地区に設置されたユニット・オフィスでは、頻繁にセミナーを開催し、研究分野をつなぐ議論を重ねている。

■京都サステイナビリティ・イニシアティブ（KSI）

http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/ksi/

京都サステイナビリティ・イニシアティブ（KSI）は、京都大学における新しい研究教育プログラムである。東京大学、京都大学、大阪大学、北海道大学、茨城大学を拠点機関として、2006 年度から 4 年間の予定で発足したサステイナビリティ学連携研究機構（IR3S: Integrated Research for Sustainability Science）の一翼を担う。

サステイナビリティ学とは、地球・社会・人間システムの持続可能性に関わる諸課題を包括的に究明する学問で、IR3S は、同分野の世界最高水準のネットワーク型研究拠点を協働で構築する目的で組織された。

KSI は、「グローバルサステイナビリティの構想と展開――社会経済システムの改変と科学技術の役割」をテーマに掲げ、人類が直面する課題解決のための「京都モデル」の構築と世界への発信をめざしている。参加部局は、エネルギー理工学研究所、化学研究所、経済研究所、人文科学研究所、生存圏研究所、防災研究所、本研究所の 7 研究所と地球環境学堂の 1 研究科である。また、地球環境学舎の修士課程にサステイナビリティコースを設け、参加大学との遠隔講義･単位互換を予定している。

本研究所は、これまで培ってきた総合的地域研究の成果や人的ネットワークを基盤に、またバンコク、ジャカルタなど海外拠点の利活用を通じて、KSI の発展に寄与していくことが期待されている。今年度は、国際シンポジウム（2006 年 3 月アジア工科大学、2006 年 11 月北京大学）での研究発表、本研究所とバンドン工科大学やインドネシア大学、バンコク連絡事務所間での遠隔ビデオ会議実験などの活動を行ってきた。来年度からは、地球環境学舎サステイナビリティコースへ講義を提供する予定である。

バンドン工科大学・東南アジア研究所間の遠隔ビデオ会議実験

濱下武志教授
第17回福岡アジア文化賞（学術研究賞）受賞

2000年4月から2006年3月まで本研究所社会文化相関研究部門教授として在籍された濱下武志教授（現龍谷大学国際文化学部教授）が、第17回（2006年度）福岡アジア文化賞（学術研究賞）を受賞されました。福岡アジア文化賞は、福岡市・財団法人よかトピア記念国際財団が主催し、アジアの多様な文化の保存と新たな創造に大きく貢献した個人・団体に贈られ、特に学術研究賞は、アジアを対象とした学術研究における優れた成果によりアジアの理解に貢献した個人又は団体を顕彰するものです。

このたびの濱下教授の受賞は、「朝貢貿易システム」「海のアジア」「華僑ネットワーク」「琉球・沖縄」など、長年にわたり膨大な歴史史料に向き合う中で深められた思索と、近代中国、現代アジアに対する強い問題意識の中から生み出された数々の刺激的研究成果が高く評価されたもので、受賞理由には、「西洋の衝撃」「近代化」「国民国家」といった既存の枠組みを根本的に問い直し、東アジア・東南アジア地域において歴史的に培われてきた地域秩序に内在する論理やダイナミズムを大胆に描き出す斬新な議論が、「まことにスケールが大きく、アジア全体を見据えた地域像の構築に先駆的役割を果たした」と指摘されています。

濱下教授は、これまで30年以上にわたり、史料を求め、また刺激的な討論・対話の場を創るべく、文字通り世界を舞台に活躍されてきました。そして一貫して歴史という観点から現在も含めて議論する視座にこだわり続けているその独創的研究と、研究に対する真摯な姿勢、温厚で謙虚なお人柄により、国内外の多くの研究者の尊敬を集めてきました。その過程で、日本のみならず、中国、香港、台湾、韓国、シンガポール、アメリカなど世界各地において、若手歴史研究者の指導と育成にも尽力されるとともに、学術交流にも多大な貢献をされてきたことも受賞理由に挙げられています。

今後引き続き華南を中心とした研究を続けていく計画であるとうかがっております。ここに心からのお祝いを申し上げると同時に、一層のご活躍をお祈りいたします。

（文責：　社会文化相関研究部門　小泉　順子）

信田敏宏著
『周縁を生きる人びと』
2006年度東南アジア史学会賞
受賞

信田敏宏国立民族学博物館助教授の『周縁を生きる人びと――オラン・アスリの開発とイスラーム化』（地域研究叢書15）が2006年度東南アジア史学会賞を受賞した。

東南アジア史学会賞は、我が国の東南アジア史学に従事する少壮研究者の業績を顕彰して、その研究を奨励し、斯学の発展に資するために東南アジア学会が2002年に設けた賞であり今年が5回目である。

同書は、マレーシアの先住少数民族オラン・アスリの1コミュニティについて、現地滞在調査に基づき丹念にまとめられた民族誌である。イスラーム化政策に対する村人の多様な反応を当該社会における社会的経済的位置と関連づけながら読み解いており、国際学界に貢献しうる優秀な作品と評価された。今回の受賞により、地域研究叢書は英文叢書も含め2004年以来毎年、出版賞受賞の栄誉に輝いたことになる。創刊から10年、今後も地域研究に寄与する優れた著作が数多く出版されることを期待したい。

なお、同時に太田淳氏(National University of Singapore)も同賞を受賞した。2006年12月10日の東南アジア学会総会において授賞式が行われる予定である。

東風南信 *Reflections*

タイのクーデタ今昔

玉田　芳史

2006年9月19日タイでクーデタが起きた。15年ぶりであった。

1990年4月に私は愛媛大学から東南アジア研究所（当時はセンター）に転任した。そのころはタイの現地情報に少しでも早く触れようと3つの週刊誌を航空便で取り寄せていた。軍は些細なことから面子をかけて90年6月には首相と衝突し始めた。91年に入ると極めて険悪となり、軍は2月21日にクーデタを決行した。翌92年4月にバンコク連絡事務所へ出かけたところ、5月に大事件が起きた。首相退陣要求集会に軍が発砲し、100名近い死者行方不明者を出したのである。轟々たる非難を浴びた軍は政治の舞台からの退場を余儀なくされた。これによって、タイは政党政治の時代を迎えた。

タイの政軍関係を研究していた私は困った。軍が政治に介入してくれないと研究対象がなくなってしまう。やむなく長いものに巻かれるようにして、民主化について研究を始めることになる。政党政治は狸の化かし合いのようで退屈であった。眠気を覚ましてくれたのは、1997年の狂乱であった。1つは通貨危機、もう1つは新憲法制定である。最大限先送りされた総選挙がやっと2001年に実施されると、政治は一変した。タイの政党政治史上に前例のない強力な首相が登場した。タイラックタイ党党首のタックシンである。選挙に強く、20年間政権を担当すると豪語した。しかし、その強さが打倒運動の呼び水になった。

2006年にタックシンへの総攻撃が始まった。1992年以来の大規模な集会による辞任圧力、手荒な取り締まりを誘おうとする傍若無人なデモや集会、国王への首相更迭請願、4月総選挙のボイコット、与党や選管を訴える訴訟、それらの訴訟の迅速な処理を促す国王、総選挙無効判決、国王の即位60周年を祝う黄色いシャツの人波、閣僚を少しずつ辞職させる「失血死」戦術、政府ではなく国王の軍隊たれという檄。次から次へと繰り出される攻撃に、タックシンは絶叫マシーンに乗っているような気持ちだったのではなかろうか。しかし、9月に入ると2カ月先の総選挙が視野に入ってきた。選挙になればタックシンの禊ぎは終わる。選挙よりも政治倫理の方が重要だと唱えていた勢力は、そこで最後の手として、クーデタに訴えた。

15年前とは大きく異なり、今や購読するタイ語週刊誌は数年前から1誌を残すだけになっていた。それでも、追放運動を逐次追えた。主要紙がインターネットで電子版を公表するようになっていたからである。禁書処分やwebサイト閉鎖等では情報のグローバルな流通は止めがたく、「タイの特殊事情」を持ち出して正当化を試みても説得力に乏しい。第二に、クーデタ後の首相がもっぱら国内を意識して選ばれた。15年前には湾岸戦争という格好の隠れ蓑にも拘わらず、国際社会と実業界への配慮が最優先されたのとは好対照である。

第三は国王の役割である。15年前は軍が勝手にやったクーデタを追認した。今回は早い時期から反タックシン運動の象徴となって権力闘争に巻き込まれていた。先般惜しくも急逝した水谷康弘くんの言を借りれば、対立の根底には「タックシンと王様のバーラミー（波羅蜜、人望・声望）獲得競争」があった。だからこそ、「軍による」クーデタであっても、「軍の」でも「軍のため」でもなかった。「王様のため」という勤王と、なりふり構わない強引さの2点では、15年前よりも30年前のクーデタと類似していた。政治的敗者は30年前は左翼勢力、15年前は軍だった。今回は見極めにはもう少し時間が必要であろう。

TAMADA Yoshifumi
1990～98年　東南アジア研究センター在職。現在は大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。タイの政治を研究している。

VISITORS' VIEWS

A Memorable Stay in Kyoto

By Adapa Satyanarayana

This was not my first visit to Kyoto. I was here on the eve of New Year's Day 1996, visiting a friend who was staying with a Japanese family. I was fascinated by the socio-cultural and religious practices of the Japanese people. The historical and cultural/heritage sites of Kyoto and Nara especially attracted my attention. I thought then that if I ever had the opportunity, I must visit this wonderful city for a longer period. So I was fortunate to obtain a visiting fellowship at the Center for Southeast Asian Studies for six months in 2006. I was keen to pursue my postdoctoral research at the Center, which has developed into a dynamic, multidisciplinary institution. And I have been impressed by the academic approach of the faculty at the Center, which reflects the different perspectives and methods of a wide variety of disciplines.

I was particularly attracted to the Center because it has established excellent international relations on the academic level and regularly interacts with and hosts renowned researchers. I was struck by the interesting series of seminars which reflect clearly the multidisciplinary character of the Center. My own study of intra-Asian migration has been immensely enriched by interaction with the Center's faculty and research scholars in the form of seminar presentations and the discussions that follow. I have spent the best and most productive period of my career in the Center and have enjoyed its camaraderie. I am glad to note that this institution has forged very healthy links with foreign scholars working in multiple fields, programmes, and disciplines on modern Asia Indeed, the most pleasing and memorable aspect of my stay at the Center is that it provided me an opportunity to meet a large number of scholars, Japanese and non-Japanese, old and young, working across a wide range of topics, who have been willing to share with me their time and ideas. This sort of academic and intellectual cooperation and hospitality reveals what the Center for Southeast Asian Studies has been able to achieve over time.

I am thankful to Professor Fujita-san for his courtesy and kindness.

(Visiting Research Fellow)

Aspects of Tradition and Modernity in Kyoto

By Abubakar Eby Hara

Before coming to Kyoto, I was told that the city was comparable to Yogyakarta in Indonesia. Both are historical cities—Kyoto has many temples and the Imperial palaces, while Yogyakarta has Borobudur and Prambanan temples and two Sultans' palaces. It was also said that Kyoto people preserve tradition, just as the Javanese in Yogyakarta maintain their tradition.

After arriving at Osaka, along the way to Kyoto, I looked at the many traditional houses and concluded that the comparison was true. However, as the days passed, I began to see some significant differences between the two cities. While Japanese houses have *tatami* and many types of traditional equipment made from wood, many modern types of equipment are also available in the house. The Japanese have kept their traditional cooking methods and utensils, as well as eating etiquette and habits. Foods are nicely served on traditional plates in Japanese restaurants, and guests are expected to observe traditional Japanese customs during mealtime. Japanese frequently eat outside the home.

In contrast to Yogyakarta, Kyoto has a very developed health system. Hospitals are well equipped with modern facilities and technology. I visited a hospital several times to have my stomach treated and I received good care from the doctors and nurses, something which is difficult to get in some hospitals in Indonesia. The medical treatment was detailed and comprehensive. To avoid wrong treatment (as often happens in developing countries), the doctor did not make a hurried conclusion about the disease. From the first treatment, it took about three months for the doctor to make a definite diagnosis of my stomach problem.

Although the hospital I visited is a small one, it has modern technology, such as endoscope and colonoscopy equipment, which are just recently available in some developing countries. Located on a hill, the small hospital is very clean and surrounded by bamboo trees.

I also visited a dental clinic on a street along the way to Shugakuin International House. The small dental clinic is even not noticeable from outside, particularly for those who cannot read

kanji. But when you enter the clinic you will find two experienced dentists and modern dental equipment. (Visiting Research Fellow)

Envisioning Devotional Landscapes in GIS

By Caverlee Cary

The sacred geographies of Buddhism have come down to us in various ways. There are maps that make visible the cosmos and the complexities of its resident deities. There are maps that guide the travels of pilgrims through geographic features marked by the divine. And as texts trace legitimizing lineages of people, places, and Buddhist images, so too maps embed landscapes with meaning through space and time, making manifest the past in the present. "The Map and the World: Visions of the Buddhist Universe" is an international collaborative project bringing together scholars around the theme of Buddhist visualizations of space.

Expressions of the Buddhist tradition in any form seem a long way from the prevailing interests of Geographic Information Systems, or GIS. GIS databases, which link information to locations on the earth's surface, are usually associated with the practical affairs of contemporary life: management of land resources or documenting urban dynamics from crime to transport to sewer systems. But GIS holds great potential for humanities disciplines as well, religion, history, and art history among them.

While on sabbatical from the GIS Center at UC Berkeley, I have been a Visiting Fellow at the Center for Southeast Asian Studies here in Kyoto, working on locating and compiling map resources for information sharing in support of "The Map and the World." Two workshops, a preliminary one at the University of California, Riverside, and a second international workshop at the National Museum of Bangkok, are being organized by collaborating faculty members specializing in religion and art history. The scholars invited to the workshops will contribute resources and expertise to the GIS mapping project, and their insights can be captured and digitally shared far beyond those attending the two programs.

Kyoto has been an especially rich environment in which to pursue the history of mapping inflected by religious traditions, from the mysteries of mandalas treasured in secret to the profusion of pilgrimage literature from urban print shops, made freely available to the teeming populace. But it is not only a question of library resources or faculty expertise. The city itself is richly alive with the sites, rites, and rituals of devotional experience. Temple arrangements, garden design, even choice of materials, makes of every visit to a temple or shrine an education in the philosophical underpinnings of religious practice. Living in Kyoto one daily sees the power of religious concept given tangible form.

(Visiting Research Fellow)

French Names in Kyoto's Urban Landscape

By Guy Trébuil

Having worked in area studies for years, I used my free time (and bicycle) to explore several cultural aspects of the Kyoto city landscape during the summer. Freshly arrived from Paris, I immediately noticed that hundreds of shops here use French names to attract customers and I was told that this was not just a recent trendy practice.

It seems to have its roots in the representation of my country, especially its well-known city of lights, as the capital of fashion, sophistication, and "chic." I better appreciated this fact after a recent evening walk through the Ginza area in Tokyo, where I had to stop in front of flashy displays of cosmetics and "grande couture" to think twice whether I was in Japan or on the Champs-Elysées! I wonder how far this cliché about the French "art de vivre" would persist when faced with the actual experience of current Parisian life.

Some of these shop names in Kyoto are quite straightforward, especially those of bars, restaurants ("Manger bien" – Eat well, "L'artisan" – The craftsman), and bakeries ("Donnez-nous notre pain quotidien" – Give us our daily bread). Others are intriguing and may indeed incite people to walk in, like the "Café de Sagan" located along the path of philosophy where one might find inspiration for writing. But a few of them are really surprising, such as the "Club désert" (Desert Club) where it seems that you have little chance to come across a friend or to make a new one. And what about the "Purée de fleurs" (smashed flowers) hair salon? A name that could scare ladies away from its scissors! Personally, I recommend that my wife try the "La vie simple" (simple life) salon in Shugakuin.

If you come across some of these strange shop names in the city, please let me know because I may continue to collect them.

(Visiting Research Fellow)

COLLOQUIA

◇ **"Changes in India's ' Castle-based Economy ? ' A Case Study of Gujarat Villages under Economic Liberalization" by *Oka Michitaro*, April 21, 2006.**

The trickle-down effect of the urban economy typically does not reach suburban villages in central Gujarat, and agricultural wage rates there are paradoxically low. This presentation addresses the "rural informal institution," locally called the *kaymi* system, in which landlords and laborers are in a mutual help relationship. The *kaymi* system is the main reason for the paradoxically low wages. It is observed in central Gujarat but not other regions, because of the caste-based land tenure system implemented by the British colonial government. Recent massive urbanization, however, has just started to change both the rural socio-economic structure and the *kaymi* system.

◇ **"Political Change and Self-Identities in Central Kalimantan" by *Benlie Abel*, June 22, 2006.**

Central Kalimantan, Indonesia, has recently attracted attention because of a sudden outburst ethnic conflict that has been termed "ethnic cleansing." Resident Madurese are being attacked, pushed out, and forbidden to live in the province by the Dayak, who have seemingly identified themselves as the "home owners." However, there have been many other political, social, and ecological changes in this area that deserve notice. This lecture examines the impact of changes in the road system on the creation of the province and on the current shape of regionalism.

◇ **"GIS Application Using Open Source Software for Presenting Archaeological Information on the Internet" by *Phanu Uthaisri*, July 10, 2006.**

The aim of this project is to display archaeological information on Hanoi, Vietnam, by using open source software for GIS applications. The project uses the open source software MapServer to create dynamic maps that can be made available on the Internet. Compared with the static maps generated by conventional methods, dynamic maps can better present information changes by using animated images. This project will make customized uses of MapServer to create a dynamic historical map. The result will be a web-based GIS application which users can access via the Internet. With these methods, we can create animated images in a displayed map. Such dynamic maps can then be applied to understanding changes in other fields.

◇ **"Labor Conflict in Colonial Burma: The Making of the Anti-Indian (Coringhee) Riot of May 1930" by *Adapa Satyanarayana*, September 28, 2006.**

This presentation deals with the nature and character of the movement of labor across the Bay of Bengal to Burma in the ninteenth to twentieth centuries in search of livelihood. It focuses on the changing nature and character of the plural society of colonial Burma and examines the course and patterns of emigration and settlement of Telugu immigrants and their interaction with the host society. It is argued that although ethnic and racial relations and socio-cultural interaction between the immigrants and the native people of Burma remained peaceful, in times of crisis, such as the 1930s world economic depression, there were also tensions and conflicts.

海外疾病だより
Getting Sick Here and There

今も通っている

阿部　健一

学生のとき初めて、ボルネオの熱帯林で２週間ほどキャンプをした。森林局のレインジャー７人と入ったのだが、一人だけマラリアにかからなかった。以後「自分は絶対にマラリアにかからない」と思い続けていたことがある。

東南アジア研究センターに助手として採用された時、世界の熱帯林をすべて見てやろうと思った。このころのセンターには、「やれないことなどないじゃないか」、といった雰囲気があった。とりあえず手始めに、体力的に一番しんどいスマトラの泥炭湿地林へ。森林の中の放棄された伐採小屋に住み、食事は近くの移住者の一家族とともにした。

蒸し風呂のような湿気がたまらない。ちょっと動いただけで汗がとめどなく落ちてくる。たしかに体にもきつかったが、それよりも単調な食事の方がこたえた。おかずは、塩干魚とキャッサバの葉のおひたしだけ。それでも、移住者の話は面白く、毎日が充実していた。

３カ月ほどたって熱が出た。やがて、ひどい下痢。のどが渇くので水を飲むが、たちまち森のなかに駆け込む。自分が一本の管になった気がした。飲んでは水を排出。管の掃除をしているようなものだ。心配した人が水を持ってきてくれる。ただ、戸口のところにおいたまま。伝染するとでも思ったのだろう。

なんの病気かわからず、手持ちの薬は飲まなかった。体力勝負で根拠もなく、いずれ回復すると思っていた。何日寝込んだのか忘れたが、衝動的に囲炉裏に残った灰をなめ、それがうまかったのを覚えている。

一気に痩せ、気がつくと足にはあちこちにデキモノができていた。皮膚がクレーター状に盛り上がり、体液が滲み出る。こいつは、最後まで治らず、帰国後病院に行った。若い医者は、難しげに「疔（ちょう）」とか「癰（よう）」とかつぶやいた後、「虫でも入っているのではないですか」といい加減なことを言った。

デキモノは、いつの間にか治った。その後、すべてとはいかないが、さまざまな熱帯林を見る機会に恵まれた。マラリアにもデング熱にもかかった。スマトラの泥炭湿地林には今も通っている。

（地域研究統合情報センター助教授）

医師からのコメント

松林　公蔵

阿部さんのはぎれのよい文章にこめられた医学的情報は、精確に病気の原因を診断しようとする科学的医師にとっては、きわめてあいまいなものである。飲水をしてもすぐに寫出してしまうような重症の下痢をきたす原因は、病原性大腸菌、コレラ、赤痢などの多数の細菌、あるいはウイルス等、ぼうだいな原因が考えられる。原因がわからないと治療ができないという医学原理主義にたてば、科学的手だては少ない。たとえ、便の培養が行えても、コレラや赤痢といった特殊な細菌が検出されれば別であるが、数百種類にのぼる細菌のいずれが病原かを特定するのは簡単ではない。事実、阿部さんは何ら医科学的手だてをうたずに“根性”で自然治癒をめざし、幸いにその願いはかなった。

しかし、阿部さんの感性するどい描写は、原因究明でなくとにかく治療する立場にたつ医師には多くの珠玉のヒントを与えてくれる。「水を飲んでは排出」とは高度の脱水を意味するし、「灰が美味しかった」のは、体内のカリウムとカルシウムが極度に不足していたからであろう。皮膚に「できもの」ができてきたのは、体内の蛋白質も喪失し免疫力が低下してきたからだ。有能な臨床家が診れば、ただちにカリウムとカルシウムを含んだ糖液とアミノ酸を含んだ点滴を開始したにちがいない。広範な抗菌作用を示すニューキノロン系（クラビットなど）の抗生物質も与えるだろう。下痢止めは使わない。２−３日で全快したはずだ。

今では、糖質−電解質の顆粒剤ができており、多くの重症下痢症小児の命を救っている。最近の診断医学は検査値を重視する傾向が強いが、阿部さんの、科学的にはあいまいな、しかし、感性的な叙述のほうが、より重要な医学的情報を提供している。

（研究所教授）

Letters from Liaison Offices
連絡事務所だより

Bangkok　バンコク

地域研究の可能性 ――文字にならない戒厳令下の現実

林　行夫

バンコク到着後一週間目の9月19日夜に「政変」と遭遇した。以来帰国までの60日間、この時しかれた戒厳令の下で過ごしたことになる。その時「立憲君主制下の行政改革団」はテレビで逐次布告や政令を朝まで流し、翌日の官公庁と銀行の臨時休業を報じたが、朝がくると事務所の職員は全員普段通り出勤してきた。「戦車を求めて」首相府と王宮に事務所の車を走らせる。街角にライフルをもつ軍人、通行止になった道路がいくつかあった。ようやく視界に入った戦車の傍らでは住民が軍人に花を捧げて記念撮影をしていた。

10数台の戦車と1,000人足らずの軍人で達成された無血事変。世論調査が8割以上の支持を示す一方、内外の識者は今回の政変を王権と軍部に頼るタイ政治の未成熟、民主主義の後退、他国の軍事政権を勢いづけるものとし、知識人Nも「名前のない記事」という論評で1997年文民憲法を全面停止する必要はなかった、と過去十数回の歴史上のトラウマを回想した。当初、地元メディアはクーデターに相当するタイ語を使わなかった。しかしこうしたグローバルな言説が表象化される過程でラッタプラハーンが登場している。他方で通貨は安定し、禁じられている5人以上の政治集会も阻止されない。旧タックシン派の拘束もとかれ暮らしはかわりない。

新空港も開通し、わたしも予定通り国境地帯へ調査にでかけた。メディアや識者が括る「貧しい東北地方民」の間に政変の痕跡はなかった。タンボン評議会も活動している。これで予算が動くと喜びの声。金のばらまき政策は住民を喜ばせたが、前首相は民主主義の英雄でもなんでもなかった。同様に軍人もわたしが思い描く軍人でないらしい。首都と地方のこうした空気に基づく政変論説は今も目にしない。タイで暮らす間にC・ギアーツとD・ワイアット、京都の若き学徒が他界した。異国の日常生活の空気を知る人たちだった。こうして表象されてきた今回の政変を、彼らならどう描いただろう。

（地域研究統合情報センター教授）

Jakarta　ジャカルタ

ジャカルタ連絡事務所半径1キロ圏内

北村　由美

ジャカルタ連絡事務所駐在員の共通の悩みは、事務所に蚊が多いことと、運動不足と豊かな食生活から来る肥満の2点だろう。私は前者に関しては、何をやっても無駄だという結論に達しつつある。後者に関しては、毎日散歩をすることで、少しでも「予防」するべく努力した。

とはいえ､ジャカルタは散歩に不向きな街である。連絡事務所がある住宅街においても、散歩をするとなると、光化学スモッグに満ちた空気、途切れることのない車の流れに加えて、あちこちにたむろしているおじさんたちからの掛け声など、各種の危険（？）を覚悟しなくてはいけない。

2003年の2月に初めて駐在した際、近所でかけられる声の中には、私を華人と間違えて、華人の蔑称「チッ」や、「チナ」と呼ぶ声が混ざることも多く、遣り切れない気持ちになった。この時期、スハルト政権下で禁止されていた春節が祝日になり、街中で華々しく祝われるようになるなど、華人をめぐる法的環境の改善が急速にすすみつつあった。しかし、街角では華人を蔑む声が日常的にささやかれていたのだ。

2006年のジャカルタは、環境面ではさらに悪化していたが、華人に関しては少し対応が変わってきたようであった。今回は、みな片言の北京語もしくは福建語でうれしそうに話しかけてきたのである。とにかく自分の知っている単語を矢継ぎ早に投げかけてきて、「オラン・チナ（華人）か？」と聞いてくるのである。

他にも、なぜか近所で道に迷っていたメダンから来た華人の女性に、大声で福建語で道を聞かれることがあった。私の外見の問題は大きいが、それにしても見知らぬ場所で、他人に話す最初の言葉が福建語で、かつ「華人なのよ」と自己紹介する気持ちになれるというのは、大きな変化だといえる。

華人ひいては中国語に対する社会の変化は、むろんビジネスにも反映されていて、事務所から徒歩5分圏内に、北京語学校が2校開校していた。散歩をかねてそのうちの一校に、通ってみた。詳細は省くが、なかなか面白い経験であった。インドネシア社会は今後どのように変化していくのであろうか。

（研究所助手）

◆ **CSEAS-NIOD (Netherlands Institute for War Documentation) International Workshop**

"New Perspectives on Chinese Business, Family, and Changing Regimes in Indonesia," July 1.

Introduction (NIOD Indonesian Chinese Programme) ▽ Abidin Kusno (University of British Columbia) "Visualizing 'Ethnic Chinese': Towards an Agenda for Research" ▽ Peter Post (Netherlands Institute for War Documentation) "Paradise Lost: The Fates and Fortunes of the Oei Tiong Ham Concern, 1930s-1960s" ▽ Aizawa Nobuhiro(National Graduate Institute for Policy Studies) "Disentangling the Chinese: The Chinese in the Making of the New Order 1965-68" ▽ Marleen Dieleman (Leiden University School of Management) "Co-evolution of Generational and Regime Changes in Ethnic Chinese Conglomerates: The Case of the Salim Group of Indonesia"

◆ **Special Seminar**

Adapa Satyanarayana (Visiting Research Fellow, CSEAS) " 'Fleeing from Caste Oppression': Emigration of South Indian Coolies to Southeast Asia, 1871-1982," May 25. ▼ James Chin (Institute of East Asian Studies, Universiti Malaysia Sarawak) "Political Change in Malaysia and Singapore: A Personal Reflection," June 9. ▼ Muhammad Salim (Visiting Research Fellow, CSEAS) "Farming Systems Development in Bangladesh : With Special Reference to Traditional Agricultural Tools," July 11. ▼ William O. Beeman (Brown University) "The Iranian Passion Drama (Ta'ziyeh) and Iranian Political Culture," July 28. ▼ Guy Francois Trebuil (Visiting Research Fellow, CSEAS) "Companion Modelling for Collective Learning at the Community Level in Southeast Asian Agroecosystems: A Case Study from Northern Thailand Highlands," September 19. ▼ Dewi Fortuna Anwa (LIPI)" Indonesian Perspective of Foreign Policy: Under the Waves of Neo-Conservatism and Its Counters," September 29. ▼羅二虎 (Luo Erho) (Visiting Research Fellow, CSEAS)「牯蔵節――中国貴州省に住む苗族にとって最も重要な祖先祭祀」October 10. ▼ Abubakar Eby Hara (Visiting Research Fellow, CSEAS) "Legalizing Shari'a (Islamic Law) and Its Impact on the 'Pancasila State' in Indonesia: The Case of Shari'a Regulations (Perda Shari'a)," October 17. ▼ Chan Kim Ling (Universiti Kebangsaan Malaysia) "Researching Big Business in Malaysia: A Social Network Perspective" ▽ Heru Susetyo (University of Indonusa Esa Unggul) "Disaster Preparedness and Natural Disaster Victim Services: Lessons learned from Japan and Indonesia" ▽ Jyothi Kukathas (The Instant Cafe Theatre Company) "The Importance of Tradition: Trying to Discover the Other" ▽ Krisnadi Yuliawan Saptadi (GATRA) "New Indonesian Films: Revival or Just Another Downturn" ▽ Alwin Aguirre (University of the Philippines) "The Fiction of Science in Asian Science Fictions: A Reading of Japanese Science Fiction and Philippine Future Fiction," November 2.

◆「東南アジアの社会と文化」研究会

第 27 回例会：5 月 19 日　伊藤正子（ASAFAS）「ベトナムの少数民族政策――法整備と民族分類再確定をめぐって」▼第 28 回例会:9 月 15 日　高橋美由紀（兵庫教育大学）「シンガポールの英語重視政策が華人社会に与えた影響について――子ども達の言語教育環境の視点から」

◆「タイ・バンコク」研究会

5 月 6 日　児玉実香（チュラーロンコーン大学）「タイにおける新しいコーヒー文化の出現と発展」▽松原章（チュラーロンコーン大学）「スカベンジャーやゴミに関わる仕事をしている人々の健康被害とその収入損失について――オンヌットのケーススタディを中心に」

◆「アジアの政治・経済・歴史」研究会

第 2 回：5 月 19 日　Harriet Zundorfer (Leiden University) "Cotton Textiles and Ming/Qing China" ▼ 第 3 回：5 月 23 日 Prijono Tjiptoherijanto (University of Indonesia) "Wage Policy and Industrialization in Indonesia" ▽ Mizuno Kosuke (CSEAS) "Industrial Conflicts and Labor Managements in Indonesia" ▼第 4 回：7 月 6 日 Gareth Austin (London School of Economics) "The Analytical Problem of the 'Embeddedness' of Economic Activity in Culture: Perspectives for Global Economic History" ▼第 5 回：9 月 16–17 日　Roy Bin Wong, Adapa Satyanarayana, Charles Horioka "The First Conference of the Economic History Network of Japan (J-EHN) " ▼第 6 回：10 月 25 日　石井米雄（人間文化研究機構長）「環境適応と国家形成――タイ国史定説再考」

◆「映像なんでも観る会」

第 1 回:5 月 26 日　『ダーウィンの悪夢』フーベルト・ザウパー監督　▼第 2 回:6 月 29 日　『マニラ光る爪』リノ・ブロッカ監督／短編『アリワン・パラダイス（娯楽の天国）』マイク・デ・レオン監督　▼第 3 回：7 月 24 日　『売春窟に生まれて――カルカッタ売春地帯の子供たち』製作者：ロス・カウフマン／ザナ・ブリスキ▼第 4 回：10 月 21 日『ルート 181 パレスチナーイスラエルの旅の断章』監督・脚本・編集:ミシェル・クレフィ／エイアル・シヴァン

◆「東南アジアの自然と農業」研究会
第 126 回例会：6 月 16 日　綱島洋之（ASAFAS）「南インド少数民族地域の営農体系における植物資源利用の重要性と可能性」

◆「農村開発における地域性――地方行政と農村開発」研究会
第 16 回例会：6 月 20 日　黒川孝宏（亀岡市文化資料館）「地域における亀岡市文化史料館の活動と役割」▽コメンテーター：河合明宣（放送大学）・佐藤寛（アジア経済研究所）・宇佐見晃一（山口大学）

◆ワークショップ
7 月 7 日　「地域研究者は被災社会に対して何ができるのか？――スマトラ沖地震・津波災害、パキスタン北部地震、ジャワ島中部地震に対する地域情報発信の経験を通じて」
趣旨説明　阿部健一 (CIAS)
I.　スマトラ沖地震・津波災害の例
山本博之 (CIAS)「ウェブサイトを通じた災害被災地の地域情報発信――その成果と課題」▽西芳実（東京大学）「地域研究者にとっての大規模自然災害」▽篠崎香織（欧亜大学）「他地域とつながる地域情報の発信の可能性」
II. パキスタン北部地震の例
山根聡（大阪外国語大学）「日本の大学からパキスタン北部地震へのかかわり」
III. ジャワ中部地震の例
岡本正明（CSEAS）他「東南アジア地域で起きた自然災害が東南アジア研究所に問いかけるもの」

◆「ジャワ島地震ワークショップ――現地報告とジャワの復興に向けての活動」
7 月 14 日　浜元聡子（CSEAS）「現地報告」▽岡本正明（CSEAS）「マクロの視点――中央政府・地方行政の対応」▽島上宗子 (CIAS)「ミクロの視点――『組織する力』から見るジャワ農村の復興」

◆「スラウェシ」研究会
7 月 14 日　茂木幹義（元佐賀医科大学）「インドネシアでの開発と媒介病研究余話――スラウェシを中心に」▽浜元聡子（CSEAS）スプルモンデ諸島研究班の活動報告「《しま影》と《しま模様》の海――地方分権下の海域社会研究」

◆「近畿熱帯医学」研究会
第 10 回例会:7 月 15 日　藤井達也（自衛隊中央病院）「自衛隊の海外活動における予防接種の研究」▽西山利正（関西医科大学）「ヨーロッパにおけるトラベルクリニックの現状」▽角泰人（京都大学）「近畿熱帯医学研究会のこれまでの歩みと今後の展望―第 46 回日本熱帯医学会での発表の報告」

◆「比較の中の東南アジア」研究会
第 9 回例会：7 月 28 日　玉田芳史（ASAFAS）「国王 vs 首相―― court coup 進行下のタイ政局」▽三宅康之（愛知県立大学）「現代中国の都市化と市制化」▼第 10 回例会：10 月 14 日　河野元子（ASAFAS）「政府党 UMNO は、いかに野党 PAS トレンガヌを奪回したのか？―― 2004 年総選挙・UMNO・マレーシア『国民戦線』」▽大西裕（神戸大学）「韓国研究の常識と政治学の常識の間――『韓国経済の政治分析』より」

◆「国家・市場・共同体」研究会
8 月 2 日　岡通太郎（CSEAS）「インド農村における賃金決定要因としてのカースト関係――経済自由化以降のトリックルダウン仮説をめぐって」▼ 9 月 20 日　Endang Sukara (Indonesian Institute of Science) “Biodiversity in Indonesia, Crisis and Sustainability”

◆「次世代の地域研究」研究会
第 1 回例会：9 月 1 日 Viengrat Nethipo (Chulalongkorn University) “The Static of Modern Thai State: Mediators in the State-Society Relations” ▽ Ito Takeshi (Tokyo University of Foreign Studies) “Managing Decentralization: Between ‘Good Governance’ and Power Contestation in West Java, Indonesia” ▽ Commentator: Patricio N. Abinales (CSEAS)

◆「山地研究会」
第 1 回：10 月 2 日　月原敏弘（福井大学）「山地研究の課題と方法――ヒマラヤとインドの低山地部の研究から」

◆ **API Seminar**
May 29
Moderator: Hayami Yoko (CSEAS)
Ekawati S. Wahyuni (Bogor Agricultural University) “Gender Issues in Elderly Care in Malaysia and Japan” ▽ Nadarajah Manickam (Asian Communication Network) “Forest, Spirits and Community: Searching for the ‘Spirit of Sustainability’”
July 3
Moderator: Caroline S. Hau (CSEAS)
Lim How Ngean (Independent Theatre Practitioner, Malaysia) “Search for Contemporary Performing Body” ▽ Noramalina Binti Mustaffa (University of Malaya) “Rehabilitating Juvenile Offenders in Malaysia, Thailand and Japan: An Overview”

Publication News

◇『東南アジア研究』44 巻 1 号

Southeast Asian Studies 44(1)

The Federation of Free Farmers and Its Significance in the History of the Philippine Peasant Movement. Masataka Kimura ▼ Records and Voices of Social History: The Case of the Great Depression in Singapore. Loh Kah Seng ▼「インドネシアにおける『創られた伝統』の萌芽と制度化の端緒――日本占領期ジャワにおけるゴトン・ロヨン（相互扶助）をめぐって」小林和夫▼「伝統医療の復興とタイ・マッサージの普及――北タイにおける村民の対応」飯田淳子▽現地通信（Field Report）「やくざ、暴力、そして呪力」岡本正明▼「タイ研修旅行」柳澤雅之

◇『東南アジア研究』44 巻 2 号

Southeast Asian Studies 44(2)

「サゴヤシを保有することの意味――セラム島高地のサゴ食民のモノグラフ」笹岡正俊▼「植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化――『NIROM の声』が描く音楽文化」田子内　進▼「華僑送金の広域間接続関係――シンガポール・香港・珠江デルタを例に」久末亮一▼「現代ベトナムにおける『逆相関関係』の存在とその要因――メコンデルタ農業における経営規模の拡大と雇用」高橋塁▼ Assessment of People's Views of Thailand's Universal Coverage (UC): A Field Survey in Thangkwang Subdistrict, Khonkaen.　Chalermpol Chamchan and Mizuno Kosuke

▽　書　評（Book Review）Guy Trébuil ;and Mahabub Hossain. *Le riz: Enjeux écologiques et économiques* [Rice: Ecological and Economic Challenges]. A. Terry Rambo ▼ Keith Foulcher and Tony Day, eds. *Clearing a Space: Post-colonial Readings of Modern Indonesian Literature*. Ramon Guillermo ▼ Hjorleifur Jonsson. *Mien Relations: Mountain People and State Control in Thailand*. 片岡　樹▽現地通信（Field Report）「探して巡る」水谷 康弘

◇研究報告書シリーズ (Research Report Series)

■ No.109. Shibayama Mamoru, ed. 2006.

Joint Proceedings: International Symposium on Area Informatics and Historical Studies in Thang Long-Hanoi; International Symposium on Digital Preservation of Historical Heritage in Thang Long-Hanoi Based on Area Informatics. International Symposium on Geo-Informatics for Historical Studies in Asia.

■ No.110. Nawarat Panyangam. 2006.

Articles of Thai Cremation Books in The Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University. 2vols.

■ No.111. 柴山　守 (編). 2006.

国際公開シンポジウム論文集『ハノイ 1000 年王城――地域情報学と探る』

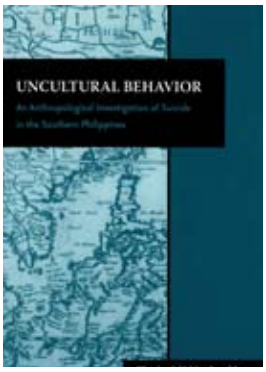
■ No.112. 林　行夫 (編). 2006.

『東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容――制度・境域・実践』

ハワイ大学出版局から 9年ぶりに叢書を出版

2006 年 11 月にハワイ大学出版局から CSEAS Monograph　Series No.21 として Charles J-H Macdonald 著 *Uncultural Behavior: An Anthropological Investigation of Suicide in the Southern Philippines* が刊行された。このシリーズからの出版は 1997 年の山田勇著 *Tropical Rain Forests of Southeast Asia* 以来、実に 9 年ぶりである。

Macdonald 氏は、フィリピンを専門とする社会人類学者でフランス国立科学研究センター（CNRS）上級研究員。2002 年に当研究所の外国人客員研究員として滞在中に、この原稿の執筆に着手した。本書は、著者の 30 年以上にわたるフィリピン南部パラワン島研究を自殺に焦点をあてて集大成した力作。パラワンの Kulbi という小さなコミュニティの人びとが、比較的幸福で経済的にも恵まれた環境にあるにもかかわらず世界で最も高い自殺率を出している地域に数えられる、その謎に迫る。



詳しい内容については、ハワイ大学出版局のウェブサイト http://www.uhpress.hawaii.edu/ を参照のこと。Amazon.co.jp でも購入可能。

図書室ニュース

➢ 図書室の新規受け入れ資料の書誌情報が、京都大学蔵書検索多言語 OPAC から見られるようになりました！

過去 3 カ月の新規受け入れ資料が一覧できます。インドネシア語、タイ語を始めとするインドネシア諸語資料については、12 月以降に入力したものが随時掲載されます。

1. 以下の URL にアクセスし、左側のメニューから、「新着情報」を選んで下さい。

http://kensaku.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/

2. 所蔵館から「東南ア研」を選択し、資料の種別、期間を指定して下さい。

➢ 東ティモール関連図書が別分類になりました！

これまで、インドネシア関連図書に含められていた東ティモール関係図書を、以下の請求記号に分けて配架することにしました。

Ⅱ Tm　ポルトガル語　英語　日本語

Ⅳ Te　テトゥン語

Ⅳ In　インドネシア語

来訪者

2006 年 5 月 26 日 Justin Wintle（アウンサンスーチー研究者）他 1 名▼ 6 月 1 日 Andrew Wells（ウォロンゴン大学教養学部長）▼ 6 月 1 日 Satanand Narain（ガイアナ稲作開発局研修員）他 4 名▼ 6 月 9 日 James U.H. Chin（マレーシアサラワク大学東アジア研究所長）▼ 6 月 27 日 Gi-Wook Shi（スタンフォード大学アジア太平洋研究センター所長）▽ Shiho Harada Barbir（同副所長）▼ 7 月 10 日 Liao Shaolian（厦門大学東南アジア研究センター教授）▼ 9 月 29 日 Dewi Fortuna Anwar（LIPI 社会人文科学担当次官）他 1 名▼ 10 月 10 日 Anthony Milner（オーストラリア国立大学アジア研究学部教授）他 1 名▼ 10 月 24 日 Nathalie Gonord（ヨーロッパ・アジア比較研究センターコーディネーター）▼ 11 月 10 日 Aris Poniman（インドネシア国家測量地図調整庁副所長）他 3 名

Kyoto Review of Southeast Asia

ウェブサイトをリニューアル

2006 年 9 月、Issue No. 7: States, People, and Borders in Southeast Asia（東南アジアの国家、民族、国境）が新しいサイト (http://kyotoreviewsea.org./) から発行されました。

この 7 号は、ミュンスター大学民族学研究所のアレクサンダー・ホルストマン教授が編集責任者となって、東南アジアの国境地帯における人類学的研究を纏めたものです。新しいサイトでは、論文に写真や図の挿入が自由となり、またオーディオやビデオ放送が可能となりました。ジョージ・ケーヒンコーネル大学教授が行った、失脚前 6 カ月のマルコス・フィリピン大統領へのインタビュー（1985 年）を聴くことができます。今後も、注目すべき国際会議、研究会、インタビューなどを積極的に取り上げる予定です。

We are happy to announce a new issue of the Kyoto Review of Southeast Asia on a new website: http://kyotoreviewsea.org.

This issue features a collaboration with guest editor Alexander Horstmann of the Institute of Ethnology, University of Munster, who has assembled a diverse group of scholars to write about the anthropology of borderlands in Southeast Asia.

We are happy to introduce our new website with this issue, as it allows us to post the photographs accompanying two of our feature articles (on the Burma-Bangladesh border and southern Thailand), as well as a photo album about cash crops in the northern mountain region of Vietnam. The site also includes audio and video streaming, which we will use to disseminate conferences, discussions, and interviews. In this issue, we are posting a 1985 recording of the late Southeast Asia scholar and Cornell University professor George Kahin interviewing Ferdinand Marcos six months before he fell from power.

(Reported by Patricio N. Abinales)

2006 年 11 月 30 日発行

発行　〒 606-8501
京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究所
Tel　075-753-7344
Fax　075-753-7356
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp

編集　岡本正明・米沢真理子